

第3回浜松学のあり方検討委員会 議事録

- 1 日時 2025年10月24日（金）午後1時30分から
- 2 場所 浜松市役所本館5階 庁議室
- 3 出席者 委員5名
(下鶴志美委員、井熊正浩委員、小田切徳美委員、高木邦子委員及び
山名副市長（委員長）)
- 事務局3名
(企画調整部長、企画課長、企画課長補佐)
- 4 報道関係者 2名
- 5 概要 以下のとおり

1 開会

(事務局による司会進行)

2 挨拶

(山名副市長)

本日は、本当に忙しい中お集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。この検討委員会でございますが、昨年度立ち上げ、これまで12月、3月と2回に分けて会議を開催してまいりました。

第1回では、地域の愛着を育むことにつながる事例や、若者の地域への愛着の状況などを紹介させていただき、皆さまから専門的な観点から、地域の魅力を知り、地域への関心を高めることについて、さまざまご意見をいただきました。

第2回目では、第1回のご意見を踏まえまして、目的や手段などをまとめた「浜松学のあり方の骨子」を示させていただきました。地域への思いを育む手段として、地域とのつながりに着目をし、他の自治体の取組み、市内の事例等を紹介させていただいたうえで、浜松の課題や必要な要素、そしてまた各委員のご経験に基づく取組事例をご意見として出していただき、意見交換を行いました。

今回は本年度初開催ということになります。第1回、第2回での議論を踏まえ、とりまとめた「浜松学のあり方検討委員会報告書（案）」を、お示しさせていただきます。報告書（案）の全体の構成、内容等、特に浜松学のポイント、検討課題について、これまでの議論を踏まえてご意見をいただきたいと思います。

また、今後本市が具体的に取り組むべき方策等につきまして、皆さま方の専門的な知見に基づいて、様々なご意見を忌憚なくいただければと思っております。

本日の第3回での議論を踏まえ、浜松学のあり方検討委員会報告書を年度内にとりまとめをしていきたいと思っております。委員の皆さんにおかれましては、それぞれの専門分野における豊富な知見を生かした活発な議論をよろしくお願ひいたします。

(事務局)

議事に移ります前に、前回第2回の委員会の中で、委員の皆さんから質問をいただきました3点について、説明をさせていただきたいと思います。

まず1点目でございます。小田切委員からいただいた「『のびゆく浜松』の活用状況はどうなっているのか」という質問についてです。「のびゆく浜松」の位置付けでございますけれども、過去も現在も変わっておらず、社会科学習の副教材として、主に小学校3、4年生や中学校の社会科の授業、それから総合的な学習の時間に、郷土について調べる際に使われております。活用頻度でございますけれども、これは先生や学校によってばらつきはあるものの、多くの学校で使われているということでございます。

2点目でございます。こちらも小田切委員からの質問です。「教育推進大綱を決めた議論の中で、『のびゆく浜松』への言及はあったのか」という質問でございます。

こちらにつきましては、教育推進大綱の策定を議論する総合教育会議の場におきまして、参加委員の1人が、「のびゆく浜松」に触れながら、「地域の魅力や価値を小さいうちから伝えるべき」という発言があり、結果といたしまして、その要素は大綱に含まれております。

続きまして3点目、高木委員からいただきました「若者アンケートで浜松が好きと答えた若者が浜松を好きになったきっかけが知りたい」という質問でございます。ストレートに好きになったきっかけを聞いたものではございませんけれども、今年の7月に実施をした市内大学生の座談会にて、浜松の魅力について学生に聞いており、その結果について、ご紹介をさせていただきますと、自然や生活環境を評価する意見が大変多く半数を超えていたということ、アニメとのコラボや映画ロケ地による聖地巡礼などの個人の嗜好に合ったイベント、また浜松まつりを通じた地域コミュニティのつながりなどに魅力を感じているという結果でございました。

3 議事

(1) 浜松学のあり方検討委員会報告書（案）について

(事務局から資料1に基づき説明)

＜意見交換＞

（委員長（山名副市長）による司会進行）

（下鶴委員）

冒頭、山名副市長からお話をございましたように、2回にわたるあり方検討委員会の話し合いが本当に丁寧にまとめられており、また、このようなことを私たちは検討してきて、またこんなにも多くの事例に取り組んでいたのだということが、改めて確認できました。大変貴重な資料だと思うとともに、改めて勉強になったという思いです。

この報告書の中の12、13、14のところに、手法とアプローチというものがございました。私はこれをなるほどと改めて思いました。検討課題を見ますと、1番目の中学校は「地域の想いを育むための方策の促進について」でございますけれども、やはり子どもたちにとって、今住んでいる、単に住んでいるという場所から大好きな場所、そして自分にとって大切な場所という、そのような思いまで抱かせると、浜松がより魅力的になるのかなと思っています。

小中学校では、総合的な学習やキャリア教育を核にして、いろいろ取り組んではございますけれども、もっと地域の魅力や価値を学ぶ機会を提供する、また地域の歴史や伝統・文化に触れる機会を積極的に洗い出して、つぶさに子どもたちに、惜しみなくそういうものを体験させることが、すごく重要ではないかと思っています。

子どもたちは、触れ合ったものや人や事については、身体で体得していく。情が深まって、本当に人間的にもいい思いをし、それがまた温かさとして根付くのではないかかなと思っています。

浜松市の第4次教育総合計画、方針1に「自分や浜松の未来をつくる人づくり」というところがございます。その施策の中に「未来のつくり手に求められる力の育成」があり、そしてまたその施策の中に「グローカル人材の育成」がございます。グローバルな視点とローカルな視点を併せ持った子どもたちの育成が、これから必要だということだと思います。世界を視野に入れながらも、地元のふるさと愛をいっぱい持った、そんな子どもたちの育成を、この教育総合計画と相まって、学校現場では今後ともやっていただければと思っております。

検討課題にある高校生や大学生時代の若者が地域とつながる取り組みの強化についてというのも、市立高校を視野に入れていいのかわかりませんけれども、その市立高校の中に、ふるさと講座とかを設けて、いかに浜松の魅力を伝えていくかということを、今後、取り組んでいく必要があるのかなと思っています。

6月30日の静岡新聞において、中野市長が20周年を記念して未来を担う高校生たちの活躍ということで、浜松にちなんだ高校生の活躍ぶりを紹介くださいました。6

校ほど紹介してございましたけど、まさしく浜松の魅力を高校生が実感して、それをどう生かしていくかというような記事で、大変勇気づけられたものです。

一過性ではなくこれを継続的に、一部の子ではなく、これが全部の子どもに広まっていくという、これからはそれが検討課題ではないかとも思っております。

(井熊委員)

質問してよろしいですか。9ページの浜松学のあり方の中で、2つ目のブロック「オール浜松で取り組むための理念や指針をとりまとめる」という、この方針をこの場で議論していくということですね。理念や指針は、もう既にここに全部示されているような気がいたしまして、私は何を発言すればいいのかよく分からないですが。具体性があってもよろしいですか。

(山名副市長)

結構です。

(井熊委員)

13ページ目の浜松学のアプローチ、年代別のアプローチの手法や流れをここで表現されていますけど、個人的に私が思うのは、各世代別の中でいきますと、やはり最初の小中学生のところが一番重要なと。三つ子の魂百までという言葉がありますけど、ここで醸成される郷土に対する意識がその後ほとんどを決めてしまうような気がします。

先ほど報告にありましたけど、「のびゆく浜松」の活用状況の中で、各学校の先生により、頻度、ばらつきがあるというお話をしたけど、頻度、ばらつきがあつてはならないような気がします。これは大変重要な副読本でありますから、一定の時間をかけて、必ず子どもたちに伝えるという、そのようなものが必要なような気がいたします。「のびゆく浜松」を使って、そこから先何があるのかということまで考えていくといいかなと思いました。

この会議で小田切先生が、群馬の「上毛かるた」の話をされていましたけど、浜松かるたを作つてもいいと思います。かるたを作つたらかるた取りを行い、クラス対抗、学校対抗、市内で大会を開いてもいいと思います。それが各生徒に対する意識を高める、1つの方策になるような気がしました。これはあくまでもアイデアですけれども。

それから、検討課題の中で、地域の想いを育む上で必要な体制というのは、これは大変難しい、非常に茫洋としたものだと私には見えるのですが、例えば、以前いろんな地方で盛んに行われていた検定のような、浜松学検定を行つてはどうですか。浜松学検定をやる以上、それを生かす何かは必要だなと思います。例えば今、浜松の観

光ボランティアガイドの会がありますが、私はボランティアではなく、お金を取るべきだと思います。そうなると、ガイドになるためにはその検定に合格した人しかガイドになれないようになります。お金が取れれば、お年寄であれば、孫に何か買ってあげられるなど、そのような心の張りがないと続かないし、体制と言うのであれば、そこまで考えてやるべきではないかと個人的には思いました。

(小田切委員)

私もいくつか申し上げたいのですが、その前に生熊委員が大変重要なことをおっしゃっていただいて、「のびゆく浜松」の使い方に違いがあるという、先ほどの話を聞いて、実は私も少し驚きながら聞いておりました。拝見して本当に素晴らしいなと思うのですが、あれがかなり使われている、同じレベルで使われているというのが望ましいなと思います。特に総合的学習の時間については、方針が大きく変わってしまうという実態を見聞きしているものですから、そうであればそこは変わらないようにすべきではないかと思います。例えば総合的学習の時間は、もちろんいろいろな方針があるにしても、3分の1以上は「のびゆく浜松」を素材にして議論する、あるいは地域に飛び出るなど、そういう大きな縛りがあってもいいのかなと思いました。

細かいものを6点ばかり、数ばかり多いのですがお許しください。

1点目に、5ページ目、6ページ目、これの統計の見方ですが、当然5ページ目の方は転入から転出を引くという計算なのですが、6ページ目で見ると、この棒グラフは見ようによつては転入と転出を足すことができます。これは言ってみれば総移動になるわけです。通常の計算は転入から転出を引いて大幅なマイナスという言い方ができるのですが、男性において、この棒グラフの長さが年々長くなっていることが分かると思います。つまり総移動量が増えているということが分かります。ここに注目すると、違う局面が見えてきて、要するに浜松だけではなく日本全体がそうなのですが、研究分野によっては、「移動前提社会」という言葉を使い始めています。要するに移動することが前提になり始めている社会です。そのことを前提として、いろんな仕組みをつくるべきであり、例えば、二地域居住もそうですが、住民票も分割できるようにする、納税も分割できるようにする。そのような議論が起こっているということを考えると、浜松においても、特に男性は移動前提社会になり始めている。つまりそのことから、浜松学をどのようにつくるのかという、その発想もできるのだろうと思います。

それから、第2に7ページ目、「人口減少局面からの脱却・転換に向けて」について、これは前々から申し上げているように、人口減少を前提として、人口減少を脱却することはもう無理だと思っておりまして、適応することが重要で、いわゆる適応策、人口減少に適応する、転換という意味合いは、たぶんそれを含めているのだろう

と思います。もっとはっきり言うと、人口減少に適応するような浜松学という、そんなふうに考えてもよいのではないかと思います。

3点目は8ページ目の2ポツ目「特定の地域やテーマを学習、研究する『ふるさと学』や『地域学』よりも」というふうになっているのですが、これはたぶん浜松学というのは各地域の、例えば昭和の合併の旧村とか、あるいはもっと遡って、明治合併の旧村でもいいのですが、そういう小さな単位での「ふるさと学」や「地域学」というのが、むしろ前提となるものだと思います。そのような小さな細胞が前提となって、より大きなところで浜松学があり、そのような細胞なしに浜松学を打ち立ててしまうと、上滑りしてしまうと思います。この「よりも」というワーディングが出ていわけではないですが、誤解を生むため、むしろ「これを前提にして」などに書き換えていただいたほうが、いいのかもしれないなと思いました。

4点目は10ページ目、「子どもや若者が住み続けたい、戻ってきたいと思う」という目指すべき姿は大変素晴らしいと思います。先ほどの移動前提社会を踏まえると、「いつでも戻ってきたいと思う」という、「いつでも」という言葉が入ることによって、戻ってきてまた出て行くかもしれない、しかし、また戻ってくればいいんだという、そういう循環を含めた表現になってくるのかなと思います。

5点目、6点目は、併せて申し上げますと、13ページ目「小中学生には関心を高める。高校生・大学生にはつながりをつくる、社会人は保ち続ける」。今回の文章と言いましょうか、この資料の最大のポイントはここにあって、素晴らしいものができていると思います。最初に言うべきだったのですが、関係人口を論じているということで幅広く、それから、世代別を論じているということでより深くという、今までの検討とは違う広さと深さが、この報告書の（案）の中にはあるなと思っております。

その点で2点申し上げたいのですが、「小中学生には関心を高める」、そのとおりなのですが、一方では、出て行ってもこんなふうにつなげるということを、小中学生にも伝えていただいてもいいのではないかと思います。ずっと「残りなさい、残りなさい」と言い続けるよりも、「出て行っても、いつでも戻ってきていい」というメッセージの方が、はるかに子どもたちに刺さるのではないかと思います。

このように考えると、例えば小中学生に、関係人口を受け入れるアイデアコンテストなどをしてすることによって、むしろ小中学生が、外からの人をどのように受け入れて、様々な方々と交わりたいというアイデアを考え、そのようなコンテストをやるという発想も出てくると思います。

そのようにしていくことで、場合によっては、出て行くかもしれないけれども、浜松市は、このようなかたちで懐深く私たちを迎えてくれるのではないかという、意識づくりにもつながっているのかなと思います。そのような意味では、関心を高めると併せて、もちろんこれが9割以上なのですが、1割程度は、出て行ってもつながりが続けられるということを、論じていただいてよいのではないかと思います。

最後に、これは残った論点とも関わるのですが、「高校生・大学生にはつながりをつくる、地域とのつながりをつくる」と表現されています。そのとおりなのですが、実は地域とのつながりというのは、よくよく見てみると人とのつながりです。地域というふうに表現していますが、特定の固有名詞があって、あの人がいる地域とつながるという、「地域」の前に「人」がいるというのが大多数です。「地域」自体はなかなか見えづらく、景観という形では見えるのですが、もっと強烈には「人」だと思います。

そのような意味において、つながるのは「地域」だけではなくて「人」とつながる。そういう意味では、「地域（人）とつながる」、あるいは場合によっては、「人と地域とつながる」など、つながる対象が「地域」というのは、随分と漠然としているなと思います。

我々、関係人口を研究しても、移住を研究しても、なぜつながるのか、それは人がいるからであり、極端に言えば、それがほとんどの回答ですので、この辺りもまた考えていただきたいなと思います。

（高木委員）

委員の皆さまと割と重なる部分が多いのですが、丁寧にまとめていただいたので、今までの考えをレビューすることができて大変有難かったです。

まず「のびゆく浜松」について、私の体感ですと、活用している先生もいらっしゃるのかもしれないですが、思ったほど活用されていないというのが多かったです。濃淡のある淡の方を、私はよく見ているなという気がしました。

もっと学校教育で「のびゆく浜松」を使おうとなると、おそらくカリキュラム的に時間が厳しいです。先生方は入れにくいだろうなとは思うのですが、幸い、次期学習指導要領で、少し弾力化して時間数に余裕を持たせようという話があるため、思い切って、その分で浜松の学校は「のびゆく浜松」を勉強するということもあるのかなと思いました。これはただ、教育現場がどう考えているかということとの調整がもちろん必要です。皆さんおっしゃるとおり、私も拝見してとてもいい教材だなと思ったので、活用されないともったいないなと思いました。

また、前回も申し上げたのですが、学校の生徒・児童以外の方が、読めるようにしていただけるといいなと思います。それこそ市外から来られた方が、浜松を知って、浜松を回る方が面白いと思います。知識があって見ると面白いじゃないですか。観光地とか、皆さんガイドブックを読み込んで行かれるのはそうだと思います。浜松を知ることによって、面白いな、好きだなと思ってくれるきっかけにもなるような教材なのではと考えており、教育現場だけの活用に限らない汎用性を、なんとか持てないものかということは継続して感じております。

少し言葉尻を捉えるようなのですが、浜松学が学問ではなくて、理念や指針のとりまとめになっている落としどころが、少し私の中で違和感がございます。「浜松学」だから、浜松について学ぶという行為の名前があるのでけれど、出てきているのは理念や指針、その過程がちょっと判然としませんというのが1点です。

理念や指針を出し、これをどなたが一番使うのでしょうか。市役所の方ですか。この理念や指針を踏まえて、誰かが何かを企画するのだと思うのですが、どなたに向けられたものなのかということが、少しここへ来て分からなくなりました。おそらく市がこうするぞという指針を出すことによって、いろんな組織が動くのかなと思うので、基本は市役所の中の意見の共通性を、ここで図りたいという理解でよろしいでしょうか。これは質問になります。

また、ご当地イベントの話が出ていましたが、浜松まつりはすごく大きなイベントなのですけれど、浜松市民のものであり、外様の方が参加しづらいイベントです。全国から来た人が浜松の何か面白いものに参加できる、言ってみれば琵琶湖の「鳥人間コンテスト」みたいな、みんながそれを目指して頑張れるようなイベントが、ものすごく大きな話ですけれども、あつたら浜松を好きになれるきっかけが増えるなと思いました。そのため、全国の人が参加できるイベントを開催するというのはどうかと思いました。

下鶴委員が継続性という話をなさっていました。たしか探求の継続性の話だったと思うのですが、何をするにしても、継続しないとそれを目指す人が減るので、例えば、探求を行うなら、探求を毎年行っている恒例のA高校の探求のイベントのようにすると、見通しも立ち、私たちのときにはこうやろうということを、皆さん思うと思います。そのように大きなイベントを継続して行うことで、今年見て、来年こそ出るぞ、再来年はどうしようと先を見通して参加しようとなるため、やはり単発ではいけないなということは同様、私も感じました。

（山名副市長）

先ほど高木委員から「浜松学は誰に向けての指針なのか」というご質問をいただきました。この点については、委員からもお話があったとおり、当委員会で指針などを取りまとめ、それを基に市が様々な分野で活用することで、市民の皆様への浸透を図っていきます。言い換えれば、市民の皆様にこのような存在を意識していただき、積極的に取り組んでいただくこととなります。したがって、最終的には市民の皆様にむけてということになるでしょう。ただし、直接的には、まず市がしっかりと確立しなければ、市民の皆さんに浸透させていくことも難しい話となりますので、しっかりと指針などをこの委員会でまとめていければと思います。

それぞれ皆さんから、本当に細かい具体的なご示唆・ご意見をいただきました。検討課題に直接お話をいただいたもの、また今までの議論の中で、あるいはこの報告書をまとめるにあたってのアドバイスもいただきました。

報告書としてまとめるのはこれからであり、このようなご意見を踏まえて変えていくことは可能ですか。

(事務局)

今回の意見を踏まえ、さらにこの報告書の厚みを増していきたいと考えております。

(山名副市長)

例えば小田切委員からいただいた、それぞれの表現の仕方のところがあろうかと思います。そこについては、今日の議論を踏まえて、それぞれ修正させていただければと思います。

それぞれの委員の皆さんからご提案もありましたが、委員の皆さん全員の意見を伺った上で、さらに何か追加をした方がいい部分や、今日の意見交換テーマであります23ページの検討課題、これに沿って先ほどご意見もいただいたところもございますが、さらに検討した方がいい点や課題として足りないのではないかというものがあれば、お願いをしたいと思います。いかがでしょうか。

1回目の検討委員会から「のびゆく浜松」について、皆さん関心をいただいており、あれだけいいものがあるのに活用しきれていないのは残念であり、統一して学校で使っていったらどうか、それがやりきれていないというもどかしさがあります。

高木委員からいただいたように、カリキュラムの話があり、学校個々に取り組んでいるところもあると思いますが、検討委員会で意見が出た話ですので、学校にはしっかりとそこは伝えていく必要があるのではないかと思います。

教育委員会として、どうでしょうか。

(下鶴委員)

前回生態委員からお話があり、私も教育センターに行き、活用状況の調査をお願いしました。小学校3年生から6年生の活用状況は9割以上の学校の社会科の授業で活用されており、必要に応じて活用しているが44.3%、一部の学年で教科書的に使っているが50.5%という結果の回答を得ました。また中学校は7割近い学校の主に社会科の授業で活用しており、社会科だけでなく、総合的な学習等でも使っているということが分かったところです。何も使っていないというところはございませんでした。

「のびゆく浜松」を読むことで、浜松の魅力を、一番大事な小中の時期に認識することができます。わがふるさとはこういうところであるということは、読んだ本人に

とっても背骨がぴんと伸びるような思いがするのではないかなと思いました。今後とも「のびゆく浜松」については、教育総務課や教育センターを通じて伝えていきたいと思っております。

(小田切委員)

下鶴委員の現場感覚を教えていただきたいと思います。総合的学習の時間で使っているかどうかが、比較的重要と思っております。少し妙な言い方ですが、我々大学において、総合型選抜いわゆる昔AO入試と言われた面接を中心とする選抜が非常に多くなってきております。

選抜では、高校の総合的探究学習でどのような学び方をしているのかというのが意外と重要であり、面接をすると、はっきりとそこが分かってくるわけです。そうなると、もちろん大学のことや入試を考える必要はないですが、総合的な学習の時間、小中学校で地域のことを考えることや、地域の課題を発見すること、地域の大人とつながることなど、そのようなことが多くできている学生が高校に入ると、力の差が出てきたりするように思います。やはり総合的学習の時間において、「のびゆく浜松」を使うというのは難しいのでしょうか。あるいは、校長先生によって方針が異なるという、私たちがよく聞く話は本当の話なのでしょうか。

(下鶴委員)

地域の素材を生かして学ぶことは、どの学校も行っております。ある学校には学校の伝統があり、そこに文化があります、浜松市は広いものですから、北遠の学校と街中の学校、それぞれがまた環境も異なり、文化、歴史も異なります。その中で学べるもののはそれぞれにあると思います。

地域と密着して学ぶ、地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に学ぶという姿勢は、本当に子どもたちの手応えになる学習であり、大事にしなければいけないと思っております。

(小田切委員)

高木委員も頷いていただいたのですが、大学入試の総合型選抜では、自ら問い合わせられるという学生を選ぼうとしております。本当にそこで一番光っているのが、普通の教科の実力も重要ですが、総合的探求の時間で、どのように学びをしているのかというのが反映することがございます。高木委員いかがでしょうか。

(高木委員)

面接の資料で必ず書かれているので拝読しておりますが、高校の探求に関しては、推薦入試のためにやっている空気を感じることもあり、本当に当人から問い合わせてい

るかは謎だなということは多いです。例えば SDGs と決められて、そこから何か決めてやりなさいという探求を、私はいくつか拝見しました。

しかし、元々探求も総合的学習も、地域の課題に自分なりの解を求めるという目的で行うものなのですが、本大学を受験した子だけかもしれないんですけど、おそらくそこが十分できていないかなという印象はあります。

本来は主体的に行うから面白いのであり、知りたいと思わせて、それを学んでいくと、浜松は凄いと再発見することにたどり着くと思います。

（下鶴委員）

問い合わせるということですね。自分の中に問い合わせを発する。そして自分たちで解決方法を考える。足で稼ぐ、聞き取って稼ぐ、調べてみる、それが本当の知識や知恵になっていくのだと思います。その力が教科にも補填していくということだと思います。

（山名副市長）

まさに探究学習ですね。

（下鶴委員）

そういうことですね。最適な学びということだと。先ほどお見せした新聞に 6 つの高校のアイデアが出ていました。例えば湖北高校は、「『湖北 MAGIC』で地域を元気に」という専門学科で行っております。浜松商業高校は「食を通じて地域の可能性を広げる」という浜松餃子のことから学んでいく、湖南高校は「浜名湖うなぎの魅力発信」、佐久間分校は「シカの糞を利用した着火剤開発」、天竜高校は春野校舎と一緒に「おにぎり・おむすびで特産 PR」、春野校舎は「はるてんむすび」をマルシェで売り、浜名高校は「文字文化の魅力を地域に紹介」。このように未来を担う高校生の活躍は大変嬉しかったです。

中学校もこのように地域に出向いて学ぶということをやっていると思います。まさしくそういうところに主体的に、目をキラキラして学ぶ子どもたちは、何をやっても追求心は高まっていくと思います。それは期待としてあります。

（高木委員）

下鶴委員が紹介いただいた新聞のように、高校生たちの探求の成果を表彰するような制度はありませんか。そのような制度によって、若い子たちが地域について考えているということを、他の世代が目にすることも大事かなと思いました。

(下鶴委員)

高校生が地元の愛着心を育むというのは、すごい力になるのではないでしょうか。エネルギーになるのではないか。これを見てまた大人たちも、勇気をもらったりするのではないかなと思いました。

先ほど皆さまのお話を聞き、10ページにある浜松学の方向性の目指す姿「こどもや若者が住み続けたい、戻ってきたいと思う『元気なまち・浜松』の実現」とあります
が、人のつながりを重視し、いつでも帰ってきていいということを良さとしたとき、
「元気なまち、やさしいまち・浜松」という方が何となく温かさがあり、皆さん
と思っている、いつでも迎えられるというような表現になるのではないかでしょうか。そ
うすると妊娠、出産、子育てを行いややすいということが言えるのではないかでしょうか。
一案です。

(山名副市長)

他にどうでしょうか。

先ほど小田切委員からもお話がありましたけれども、移動をすることを前提とする
考え方をこの報告書の中で前面に出ていくと、本当に一つひとつの言葉が変わっていく
のかなという気がしました。この貢だけではなくて、全体的にそういう意識で少し
見直すといいかかもしれません。

(高木委員)

庄内半島に結構空き家があると聞きましたが、その空き家を、例えばセカンドハウ
スにする一定の人たちを獲得する。あとは「おてつたび」をご存じですか。お仕事し
て泊めていただいく。その「おてつたび」を斡旋されている方に聞くと、「結構気に入
ってリピーターが出る」とおっしゃっていました。浜松の良さを知ってもらうきっかけ
にはとてもいいのではないかと思います。

最初は少し来るだけの人など、チャンスをたくさん作るのもいいのではないかと思
います。

また、最近知り合った方で、「フルリモートで仕事をして浜松に住んでいます」とい
う方も結構出てきました。

(山名副市長)

そうですか。

(高木委員)

何か理由はあるのでしょうか。

(山名副市長)

浜松に住み、フルリモートということでしょうか。

(高木委員)

そうです。「本社は東京にあります」とおっしゃっていました。

(山名副市長)

企業さんの中でもそのような就労形態を進めているところもありますね。

(高木委員)

住むのに良いから浜松に住んでくれているのであればいい。

(山名副市長)

どこに住むのかという選択は、社員の方の選択にはなるでしょうけれども。

(高木委員)

たまたまでしょうかね。

(事務局)

万が一のときに、地理的に東京に移動しやすいというのがあるのかもしれないです。あまりに遠くに離れすぎてもいけないと思います。

(下鶴委員)

新幹線ですぐに行ける。

(事務局)

東京は非常に家賃が高くなっていますので、移動がしやすいところを選ぶ人も当然出てきているのかなと感じています。

(山名副市長)

23 ページの検討課題に戻りますが、皆さんからいただいたご意見の中で、この中の下から 2 番目のポツで、若者の親へのアプローチについて、今のご意見の中からはありませんでしたが、いかがでしょうか。

(井熊委員)

具体的にどのようなことでしょうか。

(事務局)

少し分かりづらくて申し訳ありません。

例えば、「移住フェアのようなものを、都内でやっている」などの情報を東京に住んでいる子どもに伝える、また就活をしている大学生の子どもに、浜松でこのような仕事ができる、このような暮らしができるという情報を伝える。

大学生になってしまふと、元々浜松出身者といつても、どこにいるのか、誰がいるのか、なかなか行政として把握することが難しいことがありますので、親が浜松に住んでいふとなると、そのような方法で、情報をアプローチしたい人に届けられないかという、そういう着眼点でございます。

(高木委員)

青年心理学の視点からすると、そこに親が出るのはちょっとと思います。

(山名副市長)

青年心理学からするとそうかもしれませんけれど、今は様々な、我々の年代からすると考えも付かないような、子どもたちに対する対応の仕方があるように思うところもあります。

(小田切委員)

ちょっといまとは違いますが、1990年代、つまり一世代前には、特に西日本中山間地域を中心に、「誇りの空洞化」というような現象、というよりも本質が広範に広がつておりました。その地域に住み続ける意味や意義を見出しかねる、具体的にはどこに生じたのかというとまさに親世代が子どもたちに対して、これは非常に厳しい言葉ですが、「こんなところに住んでいないで出て行け」と。「そのためにお前には学を付けてやるんだ」と、そのような言い方が90年代まで当たり前にされておりまして、これを我々は「誇りの空洞化」と呼んでおり、その部分に施策が刺さり込まないかぎり、どんな施策を展開しても必ず倒れてしまう。そのような議論をしていました。

その後、さすがにそのような極端な議論というのは少なくなってきたのですが、もし残っているとすると、そこに住むか出て行くかの二者択一だという思いを持っていふ方は、そのような言い方をしてしまうのではないかと思います。

先ほどのように、いつか戻れる選択肢があり、戻ってもまた出る選択肢もある、つまり二者択一ではなく、ある種のグラデーションであると考えた瞬間に、この「誇りの空洞化」も、また別の局面に入ってくると思います。

おそらく今はそのようになりつつあるということだとすれば、まだ二者択一的に考えられている方に対して、今は出て行っても職場もないからそうなんだろうけど、将来的にはいろいろ移住者もいるし、こういうライフスタイルもあるよということに親世代、親世代より上の世代かもしれませんが、伝えるということに意味があるのではないかと思ったりします。

(井熊委員)

高校の同窓会があり、仲が良かった友人に久しぶりに会い、今は県外に住んでいるが、週に1回必ず浜松に来ていると聞きました。何のために来ているのか聞いたら、親が残した畠を見に来ており、自分で耕していると。親にはもう農業はダメだから辞めた方がいいと言われ、大学を出て、大手メーカーに入って県外に住んでいるけども、親が残した畠があるから帰ってきて、「浜松に帰ってこられるのは、うれしいことだと思う」と言っていました。週に1回も来ているなら住めばいいのではないかと思いました。

そういう意味では、親がどうのこうのということもありますけれど、経済的な問題も含めてすごく広範囲な問題なので、あえて言うならば、子どもが親へどうのこうのというのは、なかなか難しいことではないでしょうか。

もしくは畠があることで帰って来られる。別の問題として良さがある。

(山名副市長)

そうですね。ありがとうございます。

(井熊委員)

あと1点いいでしょうか。前々回もありましたけど、浜松まつりの話です。高木先生がおっしゃっていた、よその人間が参加できない浜松まつりというのは、非常にもったいないと思います。浜松まつりは「見る祭り」ではなく、「参加する祭り」だと私も思うからです。要は地元ではない人も参加できる工夫が必要で、徳島の阿波踊りは県外の人が参加できますよね。〇〇連で別に作ってその場で教えて参加できるようにしている。浜松まつりもできると思いますけど、なんでそれをやらないですかね。

もう1つ、私の下の世代くらいから、中学生・高校生は参加してはいけないと言われていました。なぜかと言うと、大人が酒を飲ませるから。今はいいのでしょうか。

(山名副市長)

参加はできます。確かに一時、高校生が駄目だという時期もあったのですけれど、学校の許可を受ければ参加できるようになっていますし、浜松まつりも変わってきて、お酒の話もありますし、終了の時間もいろいろあって、心配される方もいらっしゃる

やいました。そこもかなりそれぞれの参加をする団体がルールを守ってきたこともあります、子どもたちも安心して参加ができるよう、中学生は何時まで、高校生は何時までなど、段階的なルールでやられていると認識しています。

(井熊委員)

まつりを続けるのであれば、むしろ子どもたちを大事にした方がいいと思います。どうやってその祭りを継承していくかということまで踏み込んだ方がいいと思います。

浜松まつりについてはその2点、参加する側の問題、それから地域外の人たち、観光面の問題点も含めると、課題はまだあるのではなかろうか。

(山名副市長)

そうですね。市役所でも5月3日には、その年の話題をテーマにした凧を揚げております。そのテーマに沿った団体の皆さんには、我々と一緒に参加していただいております。これは凧揚げの方ですが、屋台の方はというと、各町の単位で参加をされていますので、その各町によって、希望される方も参加できるような町内のルールを作つて行っているところもあるとは聞いたことがあります、積極的に行っているかどうかはわかりません。

(井熊委員)

観光客相手の場合は、市が主体となってやらざるを得ないのではなかろうか。先ほど小田切委員がおっしゃった「人」の問題で、私は年が年なので子どもの頃から参加していましたけど、お祭りのリーダーがいるわけです。他の会所の前を通過ときは、法被を裏返して通れと、それが礼儀だと、そのようなことまで教えられるわけです。そのような人がいるから、大学生になっても帰ってきて祭りに参加したい、あのおじさんまだ元気にいるかなと。そのような先輩方からいろいろ教えられること自体は、地元に対する愛着が増す1つの理由になっていく気がします。

私の会社の社員で、浜松まつりに出たくて浜松に帰ってきたって社員がいます。当時は驚きましたけれども、今思えば、ああそうかと思います。

(下鶴委員)

今聞いていまして、浜松まつりは、高校生などに地元愛着心を育むために、すごく効果的なのかなと思います。それも参加ではなく参画することが大事です。自分たちが祭りを作っているという思いをさせていただければ、先輩に教わったことを引き継いでこうしていこうという、そのような意識になればもっともっと違う、浜松まつりをこういうふうにしたいという思いが前面に出ると、自分たちでつくっていく、新し

い祭りをつくっていく。もちろんいいものを引き継ぎながら。そうすれば浜松の未来は安泰かなと考えています。

(高木委員)

地元の活動への巻き込み方なのでしょう。「やりなさい」というのではなく、多分、お客様みたいに「中学生はこれをやりましょう」と決められたことをやるのではなく、「君たちで考えてやってごらん」というところが必要になるかなと思います。

(下鶴委員)

任せる部分、それが参画意識だと思います。

(高木委員)

大人が協力はするが、主体は自分たちだという形の巻き込み方をしないと、たぶん面白くないのでしょう。

(下鶴委員)

このようなときに力になるのが総合的学習にて、どのようなことを学んできたのかという力が試されるのかなと思っています。それは学校と地域との、まさに子どもたちの力ではないかなと思います。

(小田切委員)

私は外に住んでいるということもあり、浜松まつりのそのようなお話はできないですが、浜松まつりのシーズンになると、必ず孫や娘からLINEで写真と動画が送られてきて、すごいものだということはいつも伝えられております。

それで思ったのは、先ほどの徳島県の隣の高知県では「よさこい」が有名なですが、「よさこい移住」というのがあるぐらいです。高知市は「よさこい移住」を推進しておりまして、祭りを1つの軸にして移住施策を展開しております。浜松もあれだけインパクトがある、それこそ娘や孫がLINEで送ってくるぐらいのインパクトがあるので、そのような可能性もあるのかなと思ったりしております。

(高木委員)

少し話題がずれていいくですか。お祭りのときにおじさんとつながるということを井熊委員がおっしゃったのですけれども、私は趣味で弓道をやるのですが、弓道場に最近、部活動の地域展開を踏まえて中学生が来ます。その中学生たちが、自分のお父さんよりももっと年上、おじいちゃんぐらいの人たちと対等に話をして、仲良くやっている姿を見て、これはいい光景だなと思いました。

部活動の地域展開は、中学生だけを集めた地域のチームになるのではなく、もっと市民と共に何かやるというところに展開できたらいいなとすごく思っています。これからのことなのですけれども、いろんなスポーツセンターに、近所の子どもだけになってしまふかもしれないけれども、中学生・高校生にもっと積極的に行っていただくような手立てがとれると、地域のおじさんやおばさんの知り合いが増える。少し市民としての自覚になっていくかなという気がします。

(山名副市長)

そうですね。それはあるでしょうね。部活動の地域展開についても、自身の学区の学校だけではなく、いろいろな活動もできますので、もっともっと幅広くいろんな方との接触も生まれてくるのかなと思います。今委員がおっしゃるようなところにも展開が進んでいくと、まさに我々が今議論していることも、お祭りももちろんですが、こちらの方もそうしたものにはつながっていくことを期待したいかなと思います。

(高木委員)

あると思います。それこそ市民協働のいろんな活動もあります。

(山名副市長)

事務局に確認です。

今日の議論の中で、具体的なところまで委員からご提案もいただいたところもありますし、まだまだこれから詰めなければいけないところもあるのですが、次回が一応まとめていくという予定ですか。

(事務局)

はい。

(山名副市長)

そうしますと、次回はもう少しこの報告書も、より深掘りしたものになるということでしょうか。

(事務局)

今回のご意見を反映させて、もう少し厚みを出していきたいと考えております。

(山名副市長)

はい。わかりました。

次回が最後になりますので、もし委員の皆さんにお気づきの点がありましたら事務局にお寄せいただければ、反映は間に合うのですね。

(事務局)

大丈夫でございます。

(山名副市長)

今日のこの場だけでは、なかなかご意見も言い足りないということであれば、また事務局にご連絡をいただければと思います。次回までには、そのようなご意見もこの中に反映をさせていきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

それでは、今日のご意見を参考に、最終の報告書をまとめさせていただきたいと思います。

では、事務局よろしくお願ひします。

4 閉会

(事務局)

ありがとうございました。

以上で本日の内容は終了となります。大変熱心なご議論をいただきまして、誠にありがとうございました。本日の会議の議事録につきましては、文書でご報告をさせていただきます。

次回の会議は来年、令和8年の2月頃を予定しております。また具体的な日程等につきましては、改めてご連絡をいたしたいと思います。

では、以上をもちまして、第3回浜松学のあり方検討委員会を閉会いたします。ありがとうございました。

(終了)